〔書　評〕

松村明著

『近代日本語論考』

土屋信一

はじめに

松村明氏『近代日本語論考』の書評を依頼された。非常に緻密に，丹念に調べて述べる氏の論述の方法とその成果とを一括りにして評することは，無理というもの。一つ一つを丁寧に読んでゆくしか方法はない。

構成

全体は，以下の11本の論文から成る。「後記」に記されているように，いずれも既に紀要・論文集その他に発表されたものである。元の発表誌を発表年月と共に掲げる。なお，(1)～(11)の番号付けは便宜的にここで用いたもので，本書の目次にはない。

(1)　新井白石と外国語・外来語の片仮名表記
　論文集『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』(昭和52年9月)
(2)　オルコック『日本語日常會話篇』とその日本語
　論文集『東京大学国語研究室創設百周年記念　国語研究論集』(平成10年2月)
(3)　明治初年の洋学会話書における助動詞「です」とその用法
　近代語学会編『近代語研究』第8集(平成2年9月)
(4)　『語學獨案内』における打消の助動詞「ない」「ぬ」とその用法
　近代語学会編『近代語研究』第9集(平成5年2月)
(5)　近世のオランダ語学――青木昆陽以前の一、二の問題――
　日本思想大系第64巻『洋学　上』(昭和51年11月)
(6)　青木昆陽とその蘭語学書
　日本思想大系第64巻『洋学　上』(昭和51年11月)
(7)　大槻玄澤と『蘭學階梯』
　日本思想大系第64巻『洋学　上』(昭和51年11月)
(8)　『折たく柴の記』とその白石自筆本
　日本古典文学大系第95巻『戴恩記　折たく柴の記　蘭東事始』(昭和39年10月)
(9)　『西洋紀聞』とその白石自筆本
　日本思想大系第35巻『新井白石』(昭和50年7月)

(10)　蘭学と国語学 《付》西洋語学書略書目

「東京大学文学部　文化交流研究施設研究紀要」第2・3号（昭和54年3月）

(11)　鶴峯戊申『語學新書』とその背景

国文学研究資料館編『国際日本文学研究集会会議録』第9回（昭和61年3月）

次に，後記によると全般的に加筆・修正を加えたとあるので，初出論文と対照させてみた。ただし，(2)(10)(11)は，今回初めて読んだもので，対照はさせていない。また，一字一句ごとに照合したものではないので，著者の重要な加筆を見落としている危険性はある。

(1)　新井白石と外国語・外来語の片仮名表記

52ページに注21を加筆したのみ。他は同文。

(3)　明治初年の洋学会話書における助動詞「です」とその用法

大きな違いは図版が全て省かれたことである。本文はもとのまま。138ページの注34は，著者の論文「春秋雑誌會話篇攷――サトウ『會話篇』書誌覚書――」を参照させるものだが，その所載誌が『近代語研究』第7集（昭和62年）から『増補　江戸語東京語の研究』（平成10年）に代わった。注35中の「本稿四〇七ページ参照。」は「本稿九〇ページ参照。」と改めるべきかと思うが，元のままである。

(4)　『語學獨案内』における打消の助動詞「ない」「ぬ」とその用法

73ページに及び，本書で最も長い論文であるが，本文部分に加筆はない。注が35カ所から38カ所に増えている。本書の番号で言えば，19，29，32が追加した注である。そのため19以降の注の番号に異同が生じている。修正されてはいるが，注33の「注28参照。」は30の誤りであろう。また(3)の「です」の論文と同様に，注14中の「本文五一六ページ」が初出のままである。「本文一四五ページ」と改めるべきかと思う。

(5)　近世のオランダ語学――青木昆陽以前の一、二の問題――

本論文は日本思想大系『洋学　上』の解説として書かれたものである。解説としての言葉遣いを改め，新たに注1～注15を付け加えている。

(6)　青木昆陽とその蘭語学書

(5)と同じ『洋学　上』の人物略伝・収載書目解題として書かれたものをまとめたものである。一は青木昆陽の「略伝」を，二は『和蘭話譯』，三・四は『和蘭文譯』，五は『和蘭文字略考』の，それぞれ解題をまとめて書き改められたものである。注1～注3は新たに付け加えられた。

(7)　大槻玄澤と『蘭學階梯』

(6)と同じく，『洋学　上』の人物略伝・収載書目解題として書かれたものをまとめたものである。一・二は，大槻玄澤の「略伝」を，三は『蘭學階梯』の解題をまとめて書き改められたものである。注1～注5は新たに付け加えられた。(6)と(7)は，上記の他

の論文に比して，加筆の程度は大きいが，論旨を変えるような書き改めではない。(7)の末尾に「『蘭學階梯』の後版には，右にあげた以外にも異版のものがあるようである。」という記述が書き加えられているのが，わずかな加筆部分である。

こういう論文集の場合，既発表の研究には手を加えない，書き加えるとすれば論文末に別記として書き加える，という方式が望ましいと思う。そうでないと，研究者は全て対照させて批判しながら読み直さなければならなくなってしまうからである。本書は安心して読み進められる。ただ，著者としては筆を抑えながらも，わずかに加筆しているのだから，今後引用するにあたっては，本書を採るべきであろう。

(8)『折たく柴の記』とその白石自筆本

本論文は日本古典文学大系所収の『折たく柴の記』の解説として執筆されたものに大きく加筆し，大きな論文としたものである。本書の後記には「新たに「五」「六」「七」の項を書き加える。」とあるが，「三」「四」「八」は古典大系解説の「三　諸本および底本」をもとにしたもので，古典大系本の「四　研究略史」は除かれ，注1〜注16が付加されている。新たに書き加えられた部分は，『折たく柴の記』の表記に関する記述と分析であり，全く新しい論文になっている。この内容については後に触れる。

(9)『西洋紀聞』とその白石自筆本

本論文は日本思想大系所収の『西洋紀聞』の解題として執筆されたものに加筆したものである。新たに書き加えられた「四」は仮名遣いに関する記述である。(8)と同様に本書にまとめるに際して，表記を中心とした分析に重点を置いた新しい論文となっている。本書編集時の著者の関心の一つが表記法にあったことを窺わせる。

内容

本書は内容から3群に分けることが出来る。

A.　表記の記述的研究

(1)　新井白石と外国語・外来語の片仮名表記

(2)　オルコック『日本語日常會話篇』とその日本語

(8)　『折たく柴の記』とその白石自筆本

(9)　『西洋紀聞』とその白石自筆本

B.　文法の記述的研究

(3)　明治初年の洋学会話書における助動詞「です」とその用法

(4)　『語學獨案内』における打消の助動詞「ない」「ぬ」とその用法

C.　洋学に関する研究

(5)　近世のオランダ語学——青木昆陽以前の一、二の問題——

(6)　青木昆陽とその蘭語学書

(7)　大槻玄澤と『蘭學階梯』

(10) 蘭学と国語学 《付》西洋語学書略書目

(11) 鶴峯戊申『語學新書』とその背景

いずれの分野の研究にも共通することは，確かな資料の探索に務めること，その資料から得られた知見を徹底的に正確に記述すること，の2点である。前者については，長い年月をかけて資料を探索し，求め得る最良の資料を取り上げていることである。洋学関係書については私は全く素人であり，著者の資料探しに費やされたであろう時間と根気に感謝し，ひたすら学恩に浴するのみである。

後者について。記述的研究に徹するということは，実は並大抵なことではない。幾つかの事例に接すると，つい私などはこれで何かが言えると思ってしまう。また，その事例の先にあるさまざまな要因に想像を働かせてしまいがちである。しかし著者の場合は，事例の把握に務める。いくら読んでも，著者の推測めいた考察は出てこない。これが著者の国語史研究の基本姿勢なのかと，改めて感じ入った。A. 表記研究と B. 文法研究について，以下に具体的に述べよう。

A. 表記の記述的研究

(1)は新井白石の著書の中から『西洋紀聞』(内閣文庫蔵白石自筆本)・『外国之事調書』(新井家蔵自筆本)・『采覧異言』(宮内庁書陵部蔵白石旧蔵写本)を取り上げ，外国語・外来語の片仮名表記の記述を行う。『西洋紀聞』は漢字平仮名交じり文，『采覧異言』は漢文体であるが，それぞれ異なりで四百数十語の外国語・外来語が片仮名表記されている。それらを五十音順配列に整理して掲げる。当時外来語を片仮名で表記するという習慣はまだない。白石は文字に大小を付け，あるいは濁点・半濁点・長音符号等を用い，あるいは2字あるいは3字を一まとまりとし，あるいは傍線その他の符号を用い，それらを書き記そうと試みる。この工夫は後世には伝わらなかった(例えば『西洋紀聞』の後の写本では消えてしまうという)が，一知識人が外国語に接して，仮名を用いて悪戦苦闘する様は感動的で，仮名の表記体系を考えるときに，きわめて有益である。

(2)はオルコック著『日本語日常會話篇』(底本は九州大学附属図書館蔵本)をもとに，ローマ字で記された日本語を観察記述したものである。同書は1863年に刊行されたもので，来日欧米人による会話書の先駆的な位置を占めている。人称代名詞の用法や助動詞の用法の記述にも重要な指摘があるが，私が興味を持ったのはローマ字表記，とくに長音の表記である。

> オの長音「オー」には，o を二つ重ねた oo と，o に長音符 ^ を付けた ô の二種のつづり字がある。(63ページ，原文は縦書き)

として，oo の例として，sooi サウイ，yoos ヤウス，hontoo ホンタウを，ô の例として，dôzo ドウゾ，sôi ソウイ，keccô ケツコウ，sayônara サヨウナラ等を掲げる。そして著者は次のように述べる。

> このオ列長音のつづり字については，各ローマ字文に付記されている仮名文のかなづかいとの密接な関連が注目される。(略) このような，ローマ字つづりとかなづかいとの関連がどのような意味をもっているのか，その点については，オルコック自身，特に何も言及してはいない。(64 ページ)

オルコックが言及していないだけではなく，著者もこれ以上には言及しない。音韻意識との関連，さらには実際の音価との関連も考えたいところだが，そこまでは踏み込まない。これから先は，さらに調査研究を必要とするためであろう。

(8)と(9)の加筆も，仮名づかい表記の記述が中心になっている。

B.　文法の記述的研究

(3)は近代語の歴史の中での難問「です」に関する研究である。文化文政期には使用例の少ない「です」が近代になって急速に普及するのはなぜか。近年研究者が取り組んでいる問題だが，著者は幕末明治初期の山々亭有人の人情本と，明治初年の洋学会話書とを資料にして，助動詞「です」の用例を求め，活用形の用法，接続のしかた等を観察する。丹念な用例探索の結果，これらの文献に見られる「です」の使われ方は，もうほとんど現代語の「です」の使われ方に近付いていると言う。ただし，「明治初年の洋学会話書における「です」のこのような使われ方が，当時の人々の「です」使用の実態と，どのような関係にあるかという点については，なおいろいろ考究しなければならない」(134 ページ) と言う。「です」の位相の問題には触れていないが，近代語の「です」研究に貴重な一石を投じた研究である。発表されたのは平成 2 年で，既に影響を受けた研究がいくつも発表されている。

(4)は，(3)と同じく近代語の難問「ない」「ぬ」の用法の発達に関する研究である。ブリンクリの『語學獨案内』は明治 8 (1875) 年の刊行である。丁寧に用例を挙げて記述する。打消の表現は「ない」と「ぬ」の使い分け，打消の過去「なんだ」から「なかった」への移り変わり，その敬体「ませんでした」に至る「ませなんだ」「ましなんだ」「ませんかった」等のバリエーションの展開，当為表現「ねばならぬ」「なければならない」等の発達など，多くの変容が見られる。本書ではそれらを丹念に追って，多くの用例を示して記述する。特に「ぬだった」「ませぬだった」に紙数を費やし，

> 「ます」を付けた敬体の場合には，打消過去の言い方として，本書においては，ほぼ，「ませぬだった」が統一的に用いられているということは，はっきりした事実なのである。(191 ページ)

と述べている。これは「なかった」がもっぱら使われていたとする先行研究に対して，修正を求めたものである。この他にもさまざまなバリエーションの発生には興味が持たれる。今後のこの方面の研究の発展にも，大きな影響を与えるだろうと思われる。

おわりに

資料を探索して，正確に記述し，それをもとに皆で考えようという姿勢が明瞭に打ち出されている研究書であると思う。

(1999年9月10日発行　東京堂出版刊　A5判　378ページ　本体価格10000円)

——共立女子大学教授——

(2000年9月26日　受理)